現代制御

No. 1234 都倉 佑悟

1 はじめに

本資料では現代制御の考え方を説明し、プログラミング (Python) を用いた現代制御の実装方法を紹介する.

2 制御対象

制御対象には図1に示す1リンクマニュピレータを用いる.

3 状態空間表現

出力は角度 $\theta(t)$ とし、入力は原点に加わるトルク T、原点まわりの慣性モーメント (Moment of Inertia: MoI)を I_o 、ダンパ係数 (Dumping cofficient) を c とした時、制御対象は式 (1) のように書ける.

$$I_o\ddot{\theta}(t) + c\dot{\theta}(t) = T \tag{1}$$

ここで新たな変数を状態変数 $x_1(t)=\theta(t), x_2(t)=\dot{\theta}(t)$ と定義し, T=u(t) とすると式 (1) は

$$I_0 \dot{x_2}(t) + cx_2(t) = u(t)$$
 (2)

となり、これを $\dot{x_2}$ について解くことで次式を得る.

$$\dot{x_2}(t) = -\frac{c}{L_0}x_2 + \frac{1}{L_0}u(t) \tag{3}$$

また $x_1(t)=\theta(t), x_2(t)=\dot{\theta}(t)$ より, $\dot{x_1}(t)=x_2(t)$ となるので, 連立方程式を用いて

$$\begin{cases} \dot{x_1}(t) = x_2(t) \\ \dot{x_2}(t) = -\frac{c}{I_c} x_2(t) + \frac{1}{I_c} u(t) \end{cases}$$
(4)

とまとめることが出来, 更に状態ベクトルを $x=[x_1(t) \ x_2(t)]^{\mathrm{T}}$ とすると $\dot{x}=[\dot{x_1}(t) \ \dot{x_2}(t)]^{\mathrm{T}}$ となり, これらと行列を用いることで式 (4) が次のように書ける.

$$\begin{bmatrix} \dot{x_1} \\ \dot{x_2} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 0 & -\frac{c}{L_0} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ \frac{1}{L_0} \end{bmatrix} u(t) \quad (5)$$

式 (5) は状態ベクトル $m{x}=[x_1(t)\ x_2(t)]^{\mathrm{T}}, \dot{m{x}}=[\dot{x_1}(t)\ \dot{x_2}(t)]^{\mathrm{T}}$ を用いることで

$$\dot{\boldsymbol{x}}(t) = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 0 & -\frac{c}{L_0} \end{bmatrix} \boldsymbol{x}(t) + \begin{bmatrix} 0 \\ \frac{1}{L_0} \end{bmatrix} u(t) \qquad (6)$$

となり, $m{x}$ に付随する行列を $m{A}, u(t)$ に付随する行列を $m{B}$ とすると次式, 状態方程式を得る.

$$\dot{\boldsymbol{x}}(t) = \boldsymbol{A}\boldsymbol{x}(t) + \boldsymbol{B}\boldsymbol{u}(t) \tag{7}$$

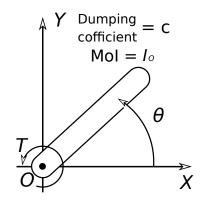


図1 1リンクマニュピレータ

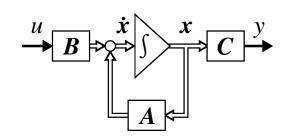


図 2 ブロック線図

また, 出力を $y(t)=\theta(t)=x_1(t)$ とすると, これも状態ベクトル $m{x}=[x_1(t)\;x_2(t)]^{\mathrm{T}}$ と行列を用いて

$$y(t) = \begin{bmatrix} 1 & 0 \end{bmatrix} \boldsymbol{x}(t) \tag{8}$$

と書け、最後に状態ベクトルxに付随する行列をCとすることで、次式のように示される出力方程式を得る.

$$y(t) = \mathbf{C}\mathbf{x}(t) \tag{9}$$

式 (7) と式 (9) をまとめると

$$\begin{cases} \dot{\boldsymbol{x}}(t) = \boldsymbol{A}\boldsymbol{x}(t) + \boldsymbol{B}\boldsymbol{u}(t) \\ y(t) = \boldsymbol{C}\boldsymbol{x}(t) \end{cases}$$
 (10)

上記式 (10) を得, 式 (10) を状態空間表現と呼ぶ. 式 (10) をプロック線図に描いた物を図 2 に示す.

4 状態空間

状態変数を座標軸とする空間を状態空間と呼ぶ. 例えば状態ベクトルを $x(t)=[x_1(t)\ x_2(t)]^{\mathrm{T}}$ とした時 $,x_1(t),x_2(t)$ が状態変数に対応し x_1 を座標平面のx軸に $,x_2$ を座標平面のy軸とした図3が状態空間となる.

もちろん状態変数を増やせば増やす程状態空間の座標軸 も増えていく.

5 Python を用いた実装

行列計算ライブラリ、numpy をインポート

import numpy as np

- # グラフ描画ライブラリ、matplotlib をインポート。
- # 実際にインポートするのは matplotlib を簡単に使

える

補助ライブラリ、matplotlib.pyplot

import matplotlib.pyplot as plt

目的: システムのパラメータを定義する(スカラ)

c: float

c = 0.1

IO: float

I0 = 1.0

目的: システムのパラメータを定義する(行列とベク

トル)

A: np.ndarray(2, 2)

A = np.array([[0, 1],

[0, -c/I0]])

B: np.ndarray(2,)

B = np.array([0, 1/I0])

C: np.ndarray(2,)

C = np.array([1, 0])

目的: 状態 x、入力 u についての状態の微分 dx/dt

を計算する

func_dxdt: (np.ndarray(2,), float) -> np.ndarray(2,)

def func_dxdt(x, u):

return A 0 x + B * u

#目的: 状態xについての出力yを計算する

func_y: (np.ndarray(2,)) -> float

def func_y(x):

return C @ x

目的: 状態 x についての入力 u を計算する

func_y: (np.ndarray(2,)) -> float

def func_u(x):

return 1

if __name__ == "__main__":

x の初期値

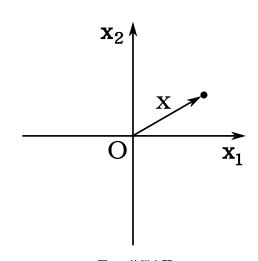


図3 状態空間

x = np.array([0, 0])

シミュレーションの時系列データ

ts = np.linspace(0, 10, 1001)

時間間隔。tsから導出される

dt = ts[1] - ts[0]

x, y, uの時系列データを保存する

x_log: np.ndarray(1001, 2)

 $x_{log} = np.zeros((1001, 2))$

y_log: np.ndarray(1001, 2)

 $y_log = np.zeros((1001, 1))$

u_log: np.ndarray(1001, 2)

 $u_log = np.zeros((1001, 1))$

オイラー法で時系列を計算する

for i in range(1001):

 $y = func_y(x)$

 $u = func_u(x)$ $x_log[i] = x$

 $y_log[i] = y$

u_log[i] = u

 $x = x + func_dxdt(x, u) * dt$

結果をプロットする

plt.figure()

plt.plot(ts, x_log)

plt.figure()

plt.plot(ts, y_log)

plt.figure()

plt.plot(ts, u_log)

plt.show()